

特集2

「いいね！」でつながる若者の人間関係

—仲間意識を縛る関係不安と共依存—



土井 隆義 Doi Takayoshi 社会学者(筑波大学人文社会系教授)
社会病理学および犯罪社会学を専攻。若者たちが抱える生きづらさの内実とその社会的な背景について、青少年犯罪などの病理現象を糸口に人間関係論の観点から考察を行っている。



多発するネットトラブル



twitterやInstagramなどのSNSに投稿された不適切な文章や写真が、他のネットユーザーからの批判を浴びていわゆる炎上事件を招いたり、その投稿内容にかかわる人々に多大な迷惑をかけたといったトラブルを引き起こしてしまう事例が、若者たちの間でしばしば目につくようになってきました。なかには国家官僚が不用意な「つぶやき」を発して問題化した事例などもありますから、これは若者だけの問題ではありません。しかし、ネットユーザーが青年層に多いこともあって、そのトラブルが青年層に多くみられるのもまた事実です。

例えば、ある若者がアルバイト先のコンビニ店内で商品の陳列棚にふざけて横たわった写真を撮り、それをtwitterに載せて問題化した事件では、その店舗は閉鎖廃業に追い込まれました。この事例のように、投稿者自身は仲間内のウケをねらっただけのつもりでネット上に載せた情報が、世間一般の人々の間にも知れわたり、多大な損害を関係者に与えてしまうケースに接すると、その不用意さはいったいどこからくるものなのかと疑問も生じてきます。

公益社団法人東京広告協会が2012年に行った「大学生の友人関係に関する意識調査」*1によれば、今日の大学生がtwitterでつながっている相手の1位は「大学の友人」、2位は「地元

*1 <http://www.tokyo-ad.or.jp/activity/seminar/pdf/FUTURE2012.pdf>

の友人」、3位は「学校の先輩や後輩」でした。twitterは、LINEとは違って基本的にオープンなつながりを志向したサービスです。しかし現実には、仲間内だけで情報を共有するためのツールとして使われることのほうが多いのです。

このような事実から見えてくるのは、今日の若者たちの日常生活にとって、身近な仲間との関係維持がいかに重要な位置を占めるようになってきているかです。そのため、このところ多発している若者をねらった悪質商法にも、若者たちの仲間意識に付け込み、それを逆手にとったものが目につくようになってきました。実際に、友人関係を傷つけないという思いゆえに、マルチ商法にかかわって加害者となってしまった若者も見受けられます。そこで、ここでは近年のトラブルの背景に潜んでいる問題を、青年層の人間関係からとらえ直してみたいと思います。

人間関係の格差化とリスク



日本の社会学者の共同研究グループである青少年研究会が行ってきた「都市在住の若者の行動と意識調査」(対象:16~29歳)によれば、10年前と比較して今日の青年層の友人数は大幅に増えています。2002年の調査では平均52人だったものが、2012年の調査では平均101人へと倍増しているのです。今日の若者たちは、以前より豊かな人間関係を築いているようです。

しかしその裏では、回答者によって友人数に大きなばらつきも生じています。調査年度によっ

て散らばりにどの程度の差があるかを比較するため、標準偏差を平均値で割った変動係数^{*2}を求めてみると、2002年には0.88だったものが、2012年には1.48になっているのです。今日の青年層の間では、友人数の増加とともに、その格差化も進行しているといえます。

また、この調査によると、友人をたくさん作るように心がけている人ほど、友人数も増える傾向がうかがえます。それは当たり前と思われるかもしれませんが、両者の連関係数^{*3}を算出して比較すると、10年前よりも今日のほうが相関度が高くなっているのです。これは、それだけ既存の組織によって友人関係が定まる比重が低下していることを意味しています。社会制度によって友人関係が縛られなくなった分だけ、個人の姿勢の比重が増すことになるからです。友人数が倍増した理由の一端は、おそらく彼らの人間関係の流動性が増したことにあり、それが同時に関係の格差化も招いているのです。

このように、人間関係の流動化が進めば進むほど、そのリスク化も同時に進行していくことになります。制度によって友人関係が縛られないということは、裏を返せば、制度によって友人関係が保証されないことでもあるからです。つき合う友人を勝手に選択できる自由の増大は、相手から自分が選択してもらえないかもしれないリスクの増大と不可分なのです。こうして、気の合う友人関係に恵まれた人と、そういった出会いに恵まれなかった人との間で、友人数の格差が大きく広がり、それがリスクの拡大として認識されることにつながっているのです。

*2 データの相対的なばらつきを示すために用いる指標。データのばらつきを示すためには、通常は標準偏差が用いられることが多いが、平均値が増すにつれて標準偏差の値は上昇するため、平均値が異なったデータ相互を比較することができない。そこで、標準偏差を平均値で割った変動係数を使って、平均値の異なったデータ相互のばらつきの度合いを比較する。

*3 調査の結果が質的なデータで与えられた場合において、2変数の関連性の強さを示す指標。数量的なデータにおける2変数の関連性を示す相関係数の質的データ版と考えればよい。連関係数が0に近いほど2変数の関連は弱く、1に近いほど関連が強いと判断される。

関係不安がもたらす共依存

内閣府が5年おきに実施してきた青年意識調査(対象:18~24歳)^{*4}によれば、友人関係に充実感を覚える若者は、1970年代以降ずっと増え続けています。先ほど指摘したように、今日では人間関係の流動性が増してきたために、既存の制度や組織によって不本意な関係を強制されることが減ってきたからでしょう。たとえ同じ組織の一員であっても、気が合わなければ無理してつき合う必要などない。そう考える若者たちは、かつてより増えていると思われます。

当然、友人関係に対して不満を覚える人は、その分だけ減るはずですが。同調査によれば、そこに悩みや心配を感じると答えた人は、確かに一時は減少していましたが、2000年以降になると、その傾向が反転し、再び増えはじめています。人間関係の流動化がさらに進んだ結果、むしろそこに強い不安を覚えるようになったからです。人間関係への不満の減少分を^{りょうが}凌駕するほど、その不安が増してきたのです。

ここには、人間関係の流動化だけでなく、もっと根源的な理由を読み取ることもできます。そもそも彼らが既存の制度に強く縛られなくなり、人間関係の流動性が高まったのは、彼らの価値観が多様化したからです。ところが、価値観の多様化によってさまざまな選択肢が横並びになると、かつてのような信念や信条を内面に持つことが難しくなってきます。それが彼らの仲間意識を過敏にしている側面もあるのです。

かつての若者たちが、成長とともに自らの内面に信念や信条を確立させやすかったのは、それらが自分が勝手に思い込んだものでなく、社会的なコンセンサスによって支えられていると感じられたからです。だから、周囲の他者の反応をそれほど気にかける必要もなく、いわば「わが

*4 「平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」第3部 有識者の分析 138~146ページ 平成26年6月内閣府 http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/thinking/h25/pdf/b3_2.pdf

道]を突き進むことも比較的容易でした。たとえばその時は周囲の人たちに自分の行動が理解されなくてもそこに普遍的な根拠がある以上、いずれは分かってもらえるはずだ、と割と素朴に期待をかけることができたのです。

しかし、今日のようにあらゆる選択肢が横並びになると、どれを基準にしたとしても、そこに普遍的な根拠を求めることは難しくなります。自分の選択に少しでも不具合が生ずると、別の選択肢にしておけばよかったかもしれないとたちまち不安に陥ってしまいます。そのため、今日の若者はかなり年長になってからも、具体的な評価の物差しを周囲にいる人々の反応に求めざるを得なくなっています。もとより自分の生き方をこれから模索していかなければならない若者にとって、仲間からの評価は大人以上の重さを持っているものですが、近年はその傾向にさらに拍車がかかっているのです。

内閉化する人間関係の病理

今日の若者たちには、少しでも多くの仲間にもっと長く自分のことを見てもらいたいという承認願望の強さが見受けられます。しかも、その仲間として彼らがイメージしている相手の多くは、ごく身近で生活圏を共にしている人たちです。そのほうが少しでも安定した承認を得られると考えているからでしょう。彼らは、「いいね!」でつながる人間関係を常に強く求めているのです。

しかし、ここには大きな落とし穴もあります。そういった閉じた人間関係を営んでいると、その関係がスムーズなときは問題ないのですが、いったん躓いてしまうと、もう自分の居場所はどこにもないと感じられます。それを回避するため、さらに関係の維持へのめり込んでいかなざるを得なくなってしまうのです。

このようにみえてくると、冒頭で指摘したSNSへの不適切な投稿に限らず、若者を取り巻くさ

まざまなトラブルの背後にも、仲間関係の維持に躍起になるあまり、その外部にまで想像力を働かす余裕がなくなっているという問題が潜んでいることに気づかされます。仲間の反応を常に確認しあっていなければならないので、その外部の人間の思惑にまで気を回すだけの余力が残されなくなっているのです。悪質商法に乗せられてしまうケースが多発するようになった背景にも、少しでも仲間の注意を引き、その関係を安定させたいという欲求の強さがあるのです。

流動化した今日の社会を生き抜くためのセーフティーネットとして、身近な仲間の重要性が増しているのは事実です。そのおかげで、孤立という恐怖からとりあえず逃れることはできるでしょう。しかし、関係の安定性を求めるあまり、深入りを避けて傷つけ合わないことに多大な時間と労力を費やしているとしたら、互いの内面の理解を深めることはかえって難しくなっているともいえます。そして、悪質業者から付け込まれる隙がそこに生じているともいえます。

だとしたら、今日の若者たちにとって必要なのは、昨今の風潮のように仲間との強固な絆づくりへ煽り立てられることではないはずです。その傾向にブレーキをかけ、関係を外部へと開き、人間関係の軸足を増やしていく機会を与えられることが必要なのです。若者の仲間意識に付け込むさまざまなトラブルを回避するためには、ただ個々の消費者意識を高めていくだけではなく、彼らの人間関係の特徴を踏まえたうえでの対策を考えていく必要もあるように思われます。

